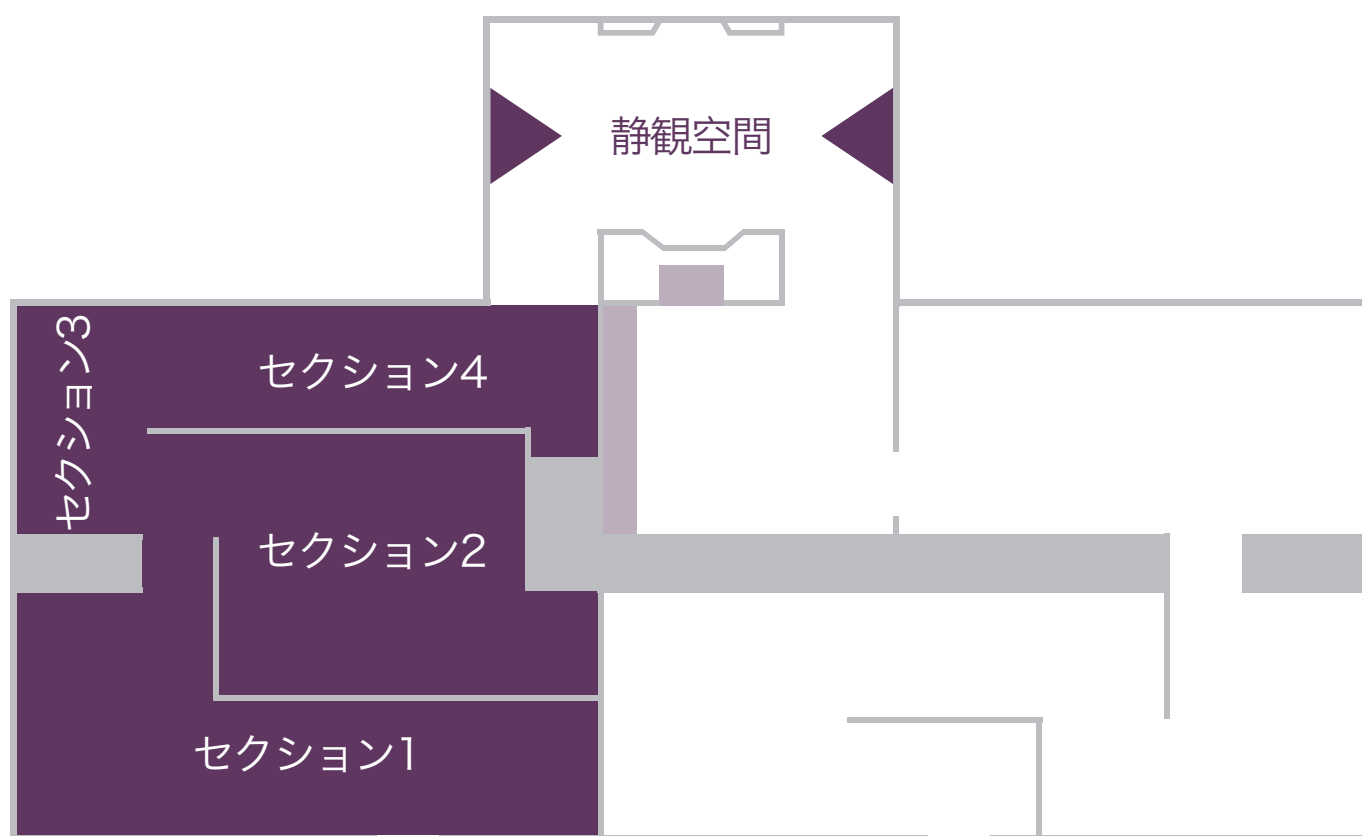


Russel Wong IN KYOTO



ギャラリーのフロアマップ

セクション1

芸妓紗矢佳

京都 2014年

ラージフォーマット、大判サイズに4x4プリントを組み合わせたもの
フォトラグペーパーにアーカイバルピグメントプリント

この芸妓紗矢佳のシルエットは、祇園鼓舞花街のお茶屋のひとつであるつる居で撮影された。この展覧会の日本の版画に触発され、ウォンの写真はすべて、江戸時代に最も人気のある木版印刷形式である大判サイズ（約39 x 26 cm）で印刷された。

173番

Shinnyodo Temple Pagoda with sakura flowers (cherry blossoms)

Kyoto, Sakyo ward, 2011

Archival pigment print on photo rag

159番

Sannenzaka

Kyoto, Higashiyama ward, 2020

Archival pigment print on photo rag

160番

Yasaka-no-Tō of Hōkan-ji (Yasaka Pagoda of Hokan Temple)

Kyoto, Higashiyama ward, 2019

Archival pigment print on photo rag

162番

Kiyomizu-dera (Kiyomizu Temple)

Kyoto, Higashiyama ward, 2011

Archival pigment print on photo rag

161番

Kinkaku-ji (Golden Pavilion)

Kyoto, Kita ward, 2020

Large format, combining 4 x 4 prints in ōban size

Archival pigment print on photo rag

168番

花街の座敷に向かう舞妓

京都、2015年

フォトラグペーパーにアーカイバルピグメントプリント

174番

冬、茶室に向かう芸妓と舞妓

京都、2014年

フォトラグペーパーにアーカイバルピグメントプリント

175番

Gion Matsuri performance

Kyoto, Higashiyama ward, 2010

Archival pigment print on photo rag

176番

Hōjō Garden in Tōfuku-ji (Moss garden in Tofuku Temple)

Kyoto, Higashiyama ward, 2015

Archival pigment print on photo rag

163番

Hōjō Southern Garden in Tōfuku-ji

Kyoto, Higashiyama ward, 2013

Archival pigment print on photo rag

164番

セクション2

座敷へ向かう花街宮川町の3人の舞妓

京都東山区 2017年

フォトラグペーパーにアーカイバルピグメントプリント

187番

Gion Shirakawa

Kyoto, Higashiyama ward, 2010

Archival pigment print on photo rag

170番

北野をどり

京都市上京区、2012年

フォトラグペーパーにアーカイバルピグメントプリント

この伝統的な踊りは北野天満宮1050周年記念の奉納として、1952年に上七軒花街で始まった。踊りを伴う芝居と、伝統的な踊りの二つからなる。

177番

Gion traditional footwear shop

Kyoto, 2013

Archival pigment print on photo rag

171番

Kagai life in Miyagawa-cho

Kyoto, Higashiyama ward, 2010

Archival pigment print on photo rag

172番

Maiko at Shimogamo Shrine

Kyoto, Sakyo ward, 2010

Archival pigment print on photo rag

186番

Face

Kyoto, 2020

Archival pigment print on photo rag

183番

お茶の後にゲームで遊ぶふく香奈とふく那

京都、梨の木神社、2020年

フォトラグペーパーにアーカイバルピグメントプリント

185番

茶席で談笑する舞妓のふく香奈とふく那

京都、梨木神社、2020

フォトラグペーパーにアーカイバルピグメントプリント

芸妓のふく音と同じく舞妓のふく香奈（右）とふく那（左）は15歳から修行を始め、16歳で舞妓としてデビューした。撮影当時はともに20歳。ふく香奈は宮城県出身、ふく那は栃木県出身。二人ともにお茶屋「みやき」に席を置く。

184番

和楽七代目の器を持つ芸妓ふく音

京都、梨木神社、2020年

フォトラグペーパーにアーカイバルピグメントプリント

芸妓ふく音が紅葉柄の茶碗を手にしている。これは和楽窯七代目の当主、川寄和楽の作品だ。

和楽窯は、江戸時代末期から京都で楽焼を製作してきた窯元である。“らく”という言葉は16世紀後半に陶土を採取した京都の場所*が由来となっている。「楽しむ」という意味の「楽」という漢字を使っている。楽焼は、日本の陶磁器の歴

史の中で重要な位置を占めている。初めて印を用い、陶芸家とパトロンの密接な協力関係に留意した陶磁器であった。

*聚楽第を建造する時に掘り出された土（聚楽土）を使って焼いた聚楽焼が楽焼の始まりとされている。

182番

ふくさ(帛紗)をたたんでいる芸妓ふく音

京都 梨子ノ木神社、2020年

フォトラグペーパーにアーカイバルピグメントプリント

芸妓ふく音が絹の布(帛紗)をたたんでいる。帛紗はいろいろな目的のために使われている。主に茶道具を浄めるために使う。使わないときは帯の内側に布を挟み込む。帛紗の大きさは標準的(約30×30cm)だが、男性と女性、年齢や資格のレベルの違い、儀式ごと、流派ごとに色が異なる。

芸妓ふく音は千葉県出身。15歳の時、彼女は宮川町花街の宮貴お茶屋で稽古を始めた。16歳で舞妓としてデビューし、21歳で芸妓になった。宮貴は明治時代に建てられた。現在の所有者は名前を継承しているが、元の漢字の宮貴ではなく、ひらがなのみやきに変更している。

179番

茶を点てる前に茶碗を清める芸妓ふく音

京都、梨の木神社、2020年

フォトラグペーパーにアーカイバルピグメントプリント

180番

梨木神社での茶会

京都市上京区、2020年

大判三部作

フォトラグペーパーにアーカイバルピグメントプリント

茶道は、日本の伝統文化を代表するものの一つである。茶道は、芸妓・舞妓の重要な稽古事の一つである。この写真では、芸妓のふく音が竹の柄杓(ひしゃく)を持ち、鉄製の釜(かま)から湯をすくっている。釜は茶室の床に作り付けられた炉(ろ)に置かれている。炉の枠には、通常炉縁(ろぶち)と言われる漆塗りの木製の枠がはめ込まれている。

この茶会は、梨木神社の茶室で開かれた。この神社には、明治維新の際に重要な役割を果たした三条實萬(さねつむ)と息子の三条實美(さねとみ)がまつられている。

178番

セクション3

Sagano Bamboo Forest at night

Kyoto, Ukyo ward, 2013

Archival pigment print on photo rag

166番

Togetsu-kyō Bridge in Spring

Kyoto, Ukyo ward, 2011

Archival pigment print on photo rag

165番

Moss garden of Kōinzan Saihō-ji

Kyoto, Nishikyo ward, 2014

Archival pigment print on photo rag

167番

Interior of Katsura Imperial Villa

Kyoto, Nishikyo ward, 2012

Archival pigment print on photo rag

169番

Lips

Kyoto, 2020

Large format, combining 4 x 3 prints in ōban size

Archival pigment print on photo rag

181番

セクション4

衿替えの儀式の間に踊りを踊る舞妓紗矢佳

京都 2011年

フォトラグペーパーにアーカイバルピグメントプリント

一人の舞妓が衿替えの前に顧客の前で「黒髪」と呼ばれる踊りを踊っている。この踊りと儀式は舞妓が芸妓になる転換点となる。

衿替えの儀式は舞妓が徐々に芸妓になる心構えをするように、2週間にわたって行われることが多い。その間に、彼女は髪型を変え、歯を黒くし、芸妓としての芸名を受け取りそれから衿の色を赤から白に変える。

188番

衿替えの儀式で新米芸妓の髪を切るお茶屋「つる居」のお母さん

京都、2011年

フォトラグペーパーにアーカイバルピグメントプリント

つる居お茶屋の田中お母さんが舞妓の髪を切っている。髪切りの儀式は、衿替えの始まりと言われている。芸妓と舞妓の違いの1つは、髪型にある。芸妓は、通常地毛の上にシンプルなかつらをつける。舞妓の髪型は、本人が受けている稽古の段階によって異なり、地毛を手の込んだかたちに結う。ここでの舞妓はさっこ(先笄)という髪型にしている。彼女がこの髪型に結うのはこれが最後になる予定だ。

お茶屋のお母さん(女将)というのは、舞妓が通常3~5年働いた後、舞妓を卒業して芸妓になることを許す判断を下す人である。そこには年齢、技能、その区域での人気、そのお茶屋の芸妓と舞妓の人数のバランスをとりたいという要求など多くの考慮すべき要素がある。

189番

衿替えの準備をする舞妓紗矢佳

京都 2011年

フォトラグペーパーにアーカイバルピグメントプリント

190番

衿替えを終えた芸妓紗矢佳

京都 2011年

フォトラグペーパーにアーカイバルピグメントプリント

舞妓になって5年後、髪切りの儀式を経て、芸妓になった

191番

着物に白衿をつけている舞妓

京都、2011年

フォトラグペーパーにアーカイバルピグメントプリント

白衿は舞妓から芸妓への卒業を示している。舞妓は、着物に白衿をつけることはできない。

192番

うなじに三本足*の模様を施した舞妓

京都、2011年

フォトラグペーパーにアーカイバルピグメントプリント

舞妓には、舞妓が正式にデビューする日(店出し)のみ、化粧をする特別なスタッフが付く。その日以降は、彼女は毎日自分で化粧をしなければならない。舞妓は店出しから1年間は下唇のみを赤く塗る。

*三本足 芸者の襟足の塗り残しの名称。通常、W字型の二本足だが、黒紋付で正装する正月と八朔（8月1日）には三本足とする。

193番

舞妓としての初日(店出し)を祝う舞妓紗月

京都 2011年

フォトラグペーパーにアーカイバルピグメントプリント

銀色の髪飾りは、舞妓としての初日(店出し)に、彼女の髪の両サイドに飾られる。

196番

Geiko Sayaka helping Maiko Satsuki with her *kanazashi* (hair ornaments)

Kyoto, 2011

Archival pigment print on photo rag

197番

店出しの日の舞妓の紗月

京都, 2011

フォトラグペーパーにアーカイバルピグメントプリント

2011年2月、紗月は舞妓として店出しを終えた。その後、2015年2月、彼女は衿替え（舞妓から芸妓への移行）を行い、芸妓としてひとり立ちした。

198番

初日を迎えた芸妓と舞妓がお茶屋に挨拶に行く様子

京都、2011

フォトラグペーパーにアーカイバルピグメントプリント

芸妓となった紗矢佳と舞妓となった紗月が近隣への挨拶まわりに向かう。

195番

芸妓・舞妓に声をかけ、彼女たちの初日の幸運を祈るお茶屋の女将田中さん

京都 2011年

フォトラグペーパーにアーカイバルピグメントプリント

花街、祇園甲部のお茶屋「つる居」女将 田中さんにとって、この日は特別だった。舞妓の店出し*と、舞妓から芸妓への移行が、同じお茶屋で、同時に行われるのは、30年ぶりのことだったのである。

*店出し 「仕込みさん」として修業していた娘さんが、舞妓さんとしてお座敷デビューすること

194番

Geiko Sayaka

Kyoto, 2011

Archival pigment print on photo rag

199番

静観空間

三条大橋

京都府京都市東山区 2020年

フォトラグペーパーにアーカイバルピグメントプリント

浮世絵に魅了され精通していたラッセル ウォンは、日本の版画の主題として取り上げられている名所や季節毎に趣の変わる場所を意識して撮影し続けてきたが、とりわけ、京都に焦点を当ててきた（有名な版画といえば、江戸であったが）。

ウォンは、広重のシリーズ作である「東海道五十三次」を親しみを込めて回顧している。ウォンは、後の版（保永堂版の後）ではいくつかの宿場の違いはあるが、広重が「東海道五十三次」を、江戸の日本橋から始め京都の三条大橋で終わらせていたということを記憶している。ウォンは、京都で芸妓・舞妓を取材している過程で、広重が版画に描いた三条大橋の構図として広重が構想したであろうと思われる場所を見つけることが出来た。

158番